新しい生活様式における学会開催のあり方とは — JSKE22+KEER オンラインまでの経緯を振り返って—

How to Hold an Academic Conference in a New Lifestyle

— Looking Back on the Process Leading Up to the JSKE22+KEER Online Events —

庄司 裕子 中央大学
Hiroko SHOJI Chuo University

Keywords : Academic activities, Online conference, New lifestyle

1. はじめに

この1年、新型コロナウイルスの感染拡大により我々の日常生活は大きく変化した。昨年4月に1回目の緊急事態宣言が発令され、オンライン対応が可能な業務ではテレワークが進んだ。学校でもオンライン授業の導入が急速に進められてきた。筆者の大学でも4月からオンラインで授業を行うことになり、3月末から4月にかけてオンライン授業のための環境整備や勉強会などがあり、教員もスタッフも不安な中でオンライン授業をスタートした。コロナ禍は全世界を巻き込んで拡大し、未だ収束への道は見えていない。長期化するコロナ禍の中で我々の日常生活では、ウィズコロナの新しい生活様式（ニューノーマル）への変革が求められている。人との接触を避けソーシャルディスタンスを保ちつつ業務を遂行するために、多くの業種でテレワークやオンライン会議への移行が進んでいる。大学を含む学校もそのひとつである。オンラインでは出来ないこともあるがメリットも多い。一旦オンラインへの移行が進めばコロナ禍が収束しても完全に元に戻ることはなく、「必要に応じて対面だが原則オンライン」を前提とした新しい生活様式が定着すると思われる。

学会活動も例外ではなく、新しい生活様式への変化が否応なしに進展している。一般的に学会活動は論文誌や学会誌の発行と、大会や研究会などの会議開催が主な事業である。雑誌の発行は人との接触を必要としないためコロナ禍でも通常通り行える（編集委員会などはもちろん全てオンライン会議に移行したが）。しかし会議の開催は密なイベントの典型であるため、現状ではオンライン開催か中止かの判断を迫られる。

もちろん我々日本感性工学会（JSKE）も例外でなく、昨年3月の第15回春季大会（JSKE15s）はやむなく中止（予稿集のみ公開）となり、昨年9月の第22回大会（JSKE22）および国際会議KEERはJSKE初のオンラインで開催した。筆者は昨年のJSKE22とKEERの自校開催を引き受けていたため、JSKE初のオンライン会議開催の計画と運営の責任者となり一連の準備を経験した。

本稿では、筆者がJSKE22とKEERのオンライン開催を決定してから実際に開催するまでの経緯を振り返る。学術的な記事ではなく体験記のようなものになり恐縮ではあるが、

記憶にとどまっているうちにお伝えしておくことにも多少の意味があると考え、そしてこれを機に、この1年の経験を踏まえ新しい日常における学会活動、特に会議開催のオンライン化の可能性と課題について考えてみたい。

2. JSKE22 + KEER オンライン開催までの経緯

2.1 春季大会が直前に中止となる（2月–3月）

2019年末から中国武漢での新型コロナウイルス感染が話題となり始め、2020年に入って国内でも感染事例が出始めた。当初我が国は島国である利点を活かして水際対策の徹底で感染拡大を阻止する方向であったが、大勢の人々の往来を完全にコントロールすることは不可能で、徐々に市中感染者が出始めた。

第15回春季大会（JSKE15s）は2020年3月5、6日に福岡市で開催する予定であり、実行委員長の本福先生（福岡工業大学）をはじめとする実行委員の方々が準備を進めていた。2月に入ってプログラムも公開し、最終調整段階に入っていた。確か懇談会では福岡市長にもご挨拶頂けるという話にもなっていたと記憶している。しかし2月半ばには福岡市でも感染が発生し、実行委員会では中止の決断をし、2月21日にWebサイトで中止の告知を行った[1]。開催のために数ヶ月前から実行委員会が一丸となって様々な準備を行っている。159件の発表申込者も既に予稿を提出済みである。実行委員長は苦渋の決断であったと思うが、その英断には敬意を表する。2月の時点では緊急事態宣言も発令されておらず、イベントの自粛は各自の判断にゆだねられていた。当時、新型コロナウイルスの感染リスクを「自分事」として捉えている人はそれほど多くなかったように思う。また、ウィルスは冬季に猛威をふるうことから春になれば落ち着くのではないかという楽観論もあった。その後の感染拡大やその長期化、深刻さを考えると、中止は賢明な選択であったと思う。

ただし、JSKE15sは中止になったものの、幸い論文投稿システムConfit[2]を通じて予稿集の公開は行われた。予稿集の公開により、発表申込者にとっては当該研究が既発表の研究成果として参照できることになる。したがって、厳密に言えばJSKE15sは中止ではなく「抄録公開をもって大会成立

とみなす」という扱いになる[3]。JSKEでは数年前よりConfitを導入してプログラム編成を行っており、3年ほど前からはUSBでの予稿集も廃止して予稿集もConfit上で公開している。Confitによるオンライン予稿集の導入がコロナ禍で奏功した形となった。予稿集公開だけでなくConfitで参加申込や投稿申込の手続を行えることは、この後オンライン開催を実現するに当たって大きな役割を果たすことになる。

また、JSKE15sでは優秀発表賞についても事前審査を行っていた。従来大会や春季大会では次年度に優秀発表賞の表彰を行っていたが、2019年3月の春季大会(JSKE14s)より大会期間中に審査と表彰を行う方式に変更した。スピーディーな表彰を行うほうが受賞者のメリットが大きいとの考えからである。この変更もコロナ禍では幸いし、当日の発表は中止になったものの事前の書面審査結果をもとに優秀発表賞を選定することができた[1]。

一方、JSKE以外の他学会に目を転じると、3月頃の中止、オンライン開催、予稿集のみ公開と対応は分かれた[3]。イベント自粛に関する規制やガイドラインがなかったため当然とも言える。3月にはオンライン開催で実施したという学会の事例について耳にすることが増え、JSKE22+KEERの実行委員長としてはオンライン開催を意識するようになってきた。中でも3月4、5日にオンライン開催された第12回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム/第18回日本データベース学会年次大会(DEIM2020)は初の大規模なオンライン開催会議であった[4]。筆者も過去に何度かDEIMに参加したことがありDEIM2020の参加案内を受け取っていた。2月中旬に福島での現地開催中止との告知があったため、DEIM2020は中止になると思っていた。それからわずか2、3週間でオンライン開催を実現したのは感嘆した。DEIMのオンライン開催までの取組は[4]でも詳しく紹介されており、我々も後々大いに参考にさせて頂くことになる。

JSKE15s中止の経緯や他学会の開催状況などを見ながら、9月のJSKE22+KEERもオンライン開催の可能性を考え始めた。3月時点でJSKE22はまだ本格的な準備を始めていなかったが、KEERの方は論文投稿が既に100件以上集まっていた。KEER実行委員の間ではできれば現地開催したいという意見も多かった。KEERはバンケット会場や企業見学の予約も入れており、中央大と連携してイベントも検討していた。オンライン開催だとキャンセルが多いのでないかといった意見も関係者には多く、筆者自身も感染状況が好転すれば現地開催できるのではないかと楽観視していた時期でもあった。

2.2 オンライン開催を決める(4月)

新年度になり4月7日1回目の緊急事態宣言が発令され、外出自粛のため多くの組織でテレワーク中心の生活が始まった。筆者の所属する中央大学でも2週間の特別休講措置を経て4月22日よりオンライン授業が開始した。3月末には東京オリンピックの延期も発表されていた。毎日新型コロナウイルス関連のニュースが報道され、欧米での深刻な状況やこの

ウィルスの恐ろしさなどが伝えられた。仮に感染者数が減っても、人々の接触が増えれば再拡大するリスクは高い。コロナ禍の長期化を覚悟せざるを得ない状況の中、JSKE22+KEERもオンラインで開催しようと決断した(理事会を経た正式決定はやや先になるが、あくまで実行委員長の決意として)。

最初の頃は関係者間で「オンラインでやるとしたらどういうやり方になるか」という“仮定”の検討をしていた。特にJSKE22はまだ企画段階であったことから、オンラインで出来ることと出来ないことを整理し、やれる範囲に絞ってコンパクトに開催しようということになった。この頃はまだ理事会メンバーの中にも、通常通りの活動ができないのであればJSKE22は中止するのも一案であるという意見もあった。しかし、学会として研究発表の機会を作り続けるべきだという意見も多く、出来ることに絞った形でも開催しようと決断した。既にJSKE15sが中止になっており、学会が開催されない状態が続くのは研究者コミュニティの衰退につながるの懸念もあった。KEERのほうでは既に投稿が集まりつつあったことも、オンライン開催への背中を押した一因であった。

4月下旬に中大での授業が始まった頃から、JSKE22プログラム委員長の荻野先生(京都産業大学)と二人で毎週オンラインミーティングを始めた。中大の授業ではWebexを利用していることからWebexで毎週金曜日の夕方に定例ミーティングをスケジュールし、JSKE22のオンライン開催に向けて本格的な検討を開始した。荻野先生とは過去に何度か実行委員長とプログラム委員長としてタッグを組んだ経験があり、まずは「二人実行委員会(?)」で率直な意見交換から始め、回を重ねるにつれて他の実行委員にもご参加頂くようになった。Confit関連でアトラス社の方とご相談したこともあった。またKEER実行委員会を開催した週もあった。この定例ミーティングはJSKE22+KEERが終了するまで続くことになる。私事ではあるが筆者は前期の金曜日午後に2コマの授業を担当しており、授業が終わった後にすぐJSKEのミーティングである。込み入った話になるとミーティングは長時間にわたることもあり、疲労困憊となる週末が続いた。

2.3 オンライン開催の概要を決める(5月)

①募集カテゴリー

5月には基本的なことから順に決めていった。まず募集カテゴリーについて検討した。JSKE22についてはまだ査読セッションのみ募集中という段階であったため、募集カテゴリーを再考することにした。通常の大会では査読セッション、一般セッション、企画セッション、ポスターセッションの4つのカテゴリーで発表を募っているが、今回は一般セッションに絞って募集をかけることに決定した。オンライン開催実現が優先であり申込件数が減るのは仕方ないと覚悟した上での決断である。ポスター形式での発表はオンラインでは難しいと判断した。また、企画セッションは通常セッション枠を提供する形で内容を企画提案者にお任せする形であるが、各企画提案者と連携しながら初の試みであるオンライン開催を運営

新しい生活様式における学会開催のあり方とは

するのは困難であると判断し、企画セッションも設けないことにした。ただし、企画セッションは例年多数の発表が集まる大会の中心的な存在ともなっており、一般セッションの中に企画セッション的な内容も盛り込めるように、部会長らにも相談しながら発表申込時のキーワードに企画内容を反映したものを設定して工夫しようと決めた。既に投稿が集まっていた査読セッションについては、発表時間が長いだけで実施形態としては一般と同じように扱えるので問題ないと考えた。

KEERでは既に投稿申込を締め切って査読も終え、5月半ばに採否通知を送ろうという段階であったため、レギュラーセッション、スペシャルセッションという募集カテゴリー自体を変更することは出来ない。レギュラーセッションには口頭発表とポスター発表があり、ポスター発表では予稿のページ数が少なかった。JSKE22同様ポスター発表はオンラインでは難しいことから、ポスター発表はショートペーパーとして口頭発表に含めることとし投稿者への変更案内を行った。この後もオンラインへの変更点が生じるたびに著者や参加者へは何度もサイトでの告知や個々の案内メールを送ることになったが、Confitを利用することでスムーズに作業が出来たのは幸いであった。

②オンライン会議ツール

オンライン開催のための必須となるオンライン会議ツールの選定では、いくつかの名前が挙がった中でZoomとWebexが候補となった。使い勝手からZoomを推す声もあった一方で、セキュリティ面からZoomを避けようとの意見も出た。昨春はZoom爆撃の被害がニュースになっていたことも影響している。半年以上経た今であればまた異なる議論となるであろう。この2つに限らずオンライン会議ツールについてはいずれも一長一短があり、熟考する時間もないため実行委員長としては腹をくくって決断するしかなく、シスコシステムズのWebex Meetingsを利用して開催することに決定した。

Webexを選んだ最大の理由は、KEERに参加予定の外国勢にZoom不可の人々が一定数いたためである。一方Webexに対しては絶対不可という人はいなかった。国内でもZoom利用を歓迎しない組織もあり、5月の時点ではWebexを選択の方が安全だと思われた。また、たまたま筆者のいる中大ではWebexを採用しており4月から授業や会議に使って自分自身が馴染んできたこと、中大の教員アカウントを使ってオンライン学会などを開催できることが確認できたことも一因である。ただし、中大のWebexアカウントを利用する場合には学外の者はWebex関連の作業を担当できなくなるため、特定の実行委員に負荷がかかってしまい、担当者がダウンした場合にもリスクヘッジしにくくなる。迷いもあったが、結果的には役割分担の明確化ができ、実行委員長としてはマネジメントしやすかったように感じる。

③動画の利用

一口にオンライン開催といってもいくつかの形式に分かれる。具体的には、リアルタイムに発表する形式、事前に動画データを収集しオンラインで公開する方式、公開した

動画を参加者にオンデマンドで閲覧してもらう形式(VOD)などがある。JSKE22+KEERではWebexを利用することに決め、基本的にはリアルタイム発表形式で行うことに決めた。Webexにはミーティングを録画する機能があり、録画を事後一定期間公開することができる。ただし、録画を撮るためには発表者の許諾を取るのが必要である。セッションを録画して後日公開するか否かについて実行委員の間で議論となった。録画可否を発表者に問う必要があること、可否が分かれた場合に取り扱いが煩雑になることなどから、録画なしを推す意見も出た。一方、録画を閲覧すればパラレルセッションを重複して聴講することができ、オンライン開催ならではのメリットという意見も出された。録画を利用できれば優秀発表賞の選に利便性が高いというメリットも指摘された。この頃から優秀発表賞は石川先生(宇都宮大学)にご担当頂き、録画を前提とした審査手順も検討を始めた。結果として録画の可否を発表者に尋ねることとし、録画可のものだけ録画公開するというように決めた。セッション中、録画の可否によって発表をまとめれば処理できる。不可能ではないが煩雑な作業が生じるのも事実であり、どちらが良いかはわからない。今回は幸い実行できたので結果オーライと考えるしかない。

KEERの方はより複雑なやり方を採用することとなった。リアルタイム発表の録画有無による2方式に加え、事前動画を提出してもらって公開するVOD方式も合わせて3つの方式のいずれかを選んでもらうことにした。国際会議では海外からの参加者も多く、時差の関係でリアルタイム発表が困難である場合もある。5月頃には我々の周辺でもオンライン開催の国際会議の事例が出始めていたが、VOD形式も多く見られた。KEERはVOD形式で統一するのも一案ではあったが、インタラクティブ性を考えるとリアルタイム発表の方が好ましいという意見が大勢を占めた。議論の末、KEERでは(1)リアルタイム録画有り、(2)リアルタイム録画なし、(3)VODの3つの方法から発表者に選択してもらうことにした。JSKE22に比べるとKEERの開催は複雑な手順にならざるを得ず、国際会議の難しさを実感した時期であった(その後も困難は続くのだが)。

④その他

その他検討し事項のうち主要なものとしては、特別講演と企業展示がある。JSKE22では谷口先生(信州大学)に内諾頂いていたものの引き続き候補者を探している段階であった。KEERでは既に特別講演の講師が決定していたが、現地開催を前提としてお願いしている状態である。オンライン学会はコロナ禍になって突然行われた変更であり、全ての講師が対応して頂けるとは限らない。既に依頼済みの講師にはオンライン開催の事情を説明しご快諾頂くことができた。時間的にも労力的にも余裕がない中で福本先生とJSKE事務局青木氏にご助力頂き、JSKE22のもうひとつの特別講演は、JSKE15sの特別講演予定者であった井上裕太氏(KESIKI INC.)にお願いすることが決まった。

JSKE22の企業展示については、今大会では行わなくてもいいのではないかという意見もあったが、非公式ながら既に展示の意向もあると聞き、VOD方式を利用してConfit上に企業展示スペースを設けることとした。KEERでVOD方式を利用することにしたためJSKE22でも利用可能と考えたためである。

このように、5月末までには大枠はほぼ決めることができた。筆者自身もオンライン授業やオンラインシンポジウムでの経験も増えてきており、この頃には事前に準備すべきこと、発生しそうなトラブルとその対策なども概ね把握できた。この頃にはオンラインでの打合せ以外にSlackを用いた情報共有も行うようになり、実行委員はもちろん事務局とも連携が取りやすい体制が構築されてきた。

2.4 詳細事項を詰める（6月）

6月には詳細な事項についても検討し、7月のJSKE22発表申込締め切り後すぐにプログラム編成に取りかけられるように準備した。プログラム編成作業自体は従来の現地開催と同様であるが、オンライン開催になったことで増える要検討事項も少なくない。6月は考えられることは全て考えて実行可能なプランに落とした。この期間に主な話題となったのは下記の項目であった。

①プログラムと予稿集

JSKE22とKEERではそれぞれのConfitを用いて投稿原稿を受け付けプログラム編成する。図1はJSKE22のConfitトップ画面である[5]。Confitでは発表申込情報をもとにセッションプログラムに割当てれば、Confitでは各発表の欄からアップロードされた予稿が参照できるようになり、Confitサイトが予稿集としての役割を果たす。このプロセスは現地開催の場合と同じである。現地開催の場合にはセッション数に応じて必要な会場を確保し、プログラム上には各セッションの欄に会場番号を掲載する。オンライン開催の場合には会場の代わりにWebexのミーティングリンクを掲載することになる。JSKE22では4パラレルセッションを予定し、発表申込が予想以上に多ければ5パラレルに拡大しようと決めた。JSKE22の発表は全てリアルタイムだが、録画の可否は発表ごとに異なるためConfitプログラム上に録画の可否を掲載することにした。

図1 JSKE22回大会のConfitトップ画面[5]

KEERはより複雑で厄介なプランニングを要した。KEERは既に大半の投稿が集まり査読を経てカメラレディ原稿待ちの段階であった。KEERではスペシャルセッションの予稿集はSpringerから出版され、レギュラーセッションの予稿は会議開催後にリンシヨーピン大学を通じて公表されることになっている。Springerのほうは出版契約も済みKEER直前に出版され原稿のリンク情報も当方に提供されることが確定している。したがってスペシャルセッションの発表についてはConfit上で予稿PDFを閲覧するのではなくSpringer予稿集へのリンクを掲載することにした。またKEERでは3種類の発表形式があるため、種別を各発表の欄に掲載すること、VOD形式の発表については動画のリンク情報を掲載することを決めた。セッション種別や発表形式による違いが多いため、準備作業で混乱や間違いが生じないよう予稿集担当の小山先生（筑波大学）やアトラス社の方とも打合せながら詳細を詰めていった。筆者自身従来のKEERの運営体制をよく知らずに現地開催を引き受けてしまったのだが、この頃ようやくKEERの抱える複雑さの全貌を明確に理解し、その複雑さに対応できる仕組みのプランニングにたどり着いた（ただしくリアになったのは筆者の頭の中でのみの話であって、7,8月の特にKEERの準備作業では混乱を極めることになる）。

② Webex 会議運営形式

Webex 関連では、中大の IT センターやシスコのサポートに問合せながら、どのような形式で運営するかを検討した。パラレルセッション個数（プラス予備1つ）分のアカウントを用いて1アカウントを1会場とする。中大教職員は一人1アカウントを持っていたが、幸いその頃学生にもアカウントが発行され始めたので、アルバイトの学生が主催者としてミーティングに参加できることになった。学生スタッフに会場管理を担当してもらい、実行委員も共同主催者として常時参加する体制をとることに決めた。必要な学生スタッフの数を算出して作業内容と手順もプランニングした。プログラム編成後に動き出して微調整すれば良いレベルの計画を6月末までに作成することができた。

オンライン学会であってもミーティング主催者のスタッフは一箇所に集まっている方が管理しやすいと考え、コールセンターのような形式で運営することにした。密にならない広い部屋でネットワーク環境が良好な場所として学科の計算機室を選び、許可を取るとともに必要な機材を手配した。主催者側のネットワークがダウンした場合のバックアップ体制についても検討した。さらに、9月の開催時にコロナ禍が深刻化していればスタッフが集まることはできず完全リモートでの運営せざるを得ないことから、その場合の代替プランを検討し練習方法も考えた。

③アナウンス情報

参加者、発表者、座長それぞれに向けてWebexでのオンライン会参加についての手順やトラブルの場合の対応などに関する情報をまとめConfit上で提供することにし、掲載すべ

新しい生活様式における学会開催のあり方とは

き項目を検討し、大まかなタイムスケジュールも決定した。6月にはWebexでのミーティングで想定されるトラブルは把握できており、他学会のオンライン開催事例も増えてきたことから、案内すべき情報は整理されてきた。開催直前に座長の接続テストを行うことも決め、手順書に基づいて必要な説明を行うことも決めた。まずJSKE22側で必要なドキュメントを作成し、英訳してKEERでも使用するとともにKEER独自で必要となるものを作成する計画を立てた。今回のオンライン開催ではWebexへの接続トラブルがある場合に主催者側から助けの手をさしのべることはできない。事前に考えられる情報は全て網羅してConfit上に掲載するように計画した。

2.5 実働部隊が準備作業を進め開催に至る（7月～9月）

6月末までに内容を固めることができたため、7月からは実際に作業を進める段階となった。実行委員長は担当者の割当てと進捗管理に徹することになる。従って本稿で記述すべきことは多くないが、実作業の多くはこの間に遂行された。

JSKE22は7月半ばの発表申込締め切り後すぐにプログラムの作成に着手した。JSKE22は主な作業を少数の実働部隊で担当していたため、連携もうまくいき順調に作業が進捗した。プログラム公開後はWebexミーティングスケジュール作成、Webex担当学生スタッフの募集と事前打合せ、Confit上に掲載するアナウンス情報のドキュメント作成、プログラム画面へのWebexリンク情報掲載、接続テストの準備と実施など、6月に立てた計画に基づいて作業を進めていった。

一方、KEERはセッション種別によって予稿集形態が異なり発表種別も3種類あるなど複雑なため、プログラム編成作業では混乱が生じた。またKEERの実行委員はJSKE22に比べて多数であり、現地開催を前提として決まっていた役割分担を変更してオンライン開催に必要な作業を割り当てていく必要があった。作業内容や手順を誤解なく伝達するのはオンラインだけのコミュニケーションでは難しい面もあった。諸事情から一部スペシャルセッションとレギュラーセッションが混在してConfit画面の個別対応が必要になったり、発表形式の変更希望やVOD発表の動画提出遅延が発生して対策を協議するなど、数え切れないくらい様々なことがあった。8月後半にはアトラス社Confit担当者に頻繁に電話をかけて細かな点を確認しながら、各実行委員の作業指示と確認を繰り返した。JSKE22で先行して準備できた内容を流用できたことは連続開催ゆえの大きなメリットであった。一時は絶望的な気分にもなったが、何とか開催日までに準備を完了することができた。

会期中、音声が出ない、画面共有できないといったトラブルはいくつかあったが、幸い致命的なトラブルはなく全ての発表を終えることができた[6]。会期中にWebexのバージョンアップがあり運営方法の変更が求められたのは想定外であったが、座長や学生スタッフがすぐに慣れて柔軟に対応してくれた。JSKE22+KEERで5日間に計250件以上の発表、のべ400名以上の方々に参加頂くことができた。

3. オンライン学会の特徴と課題

3.1 開催に不可欠なツール

我々の経験や巷の体験談などから、オンライン学会開催のためのシステム構成に最低限なものは下記の3つであると考えられる。オンライン学会3種の神器とも言える存在である。

- 1) 投稿管理システム
- 2) オンライン会議ツール
- 3) チームコミュニケーションツール

1)の投稿管理システムは希望者が発表申込予稿提出、参加登録手続を行うためのプラットフォームであり、JSKE22+KEERではConfitを用いた。主催者側は投稿管理システムを用いてプログラム編成や査読のやり取りも行う。予稿集の電子化が進んでいる昨今、投稿管理システムは現地開催の場合でも活用される場合も多い。しかしオンライン開催の場合必要不可欠な存在となる。参加者は投稿や参加申込をするだけでなく会議に参加する際のエントリーポイントとして必ずシステムにアクセスする。またネットワーク接続や会議ツールの不具合といったトラブルの場合に必要な情報の入手もこのシステムを経由する。会議参加者が必要なコンテンツは全て投稿管理システムで一元管理される。

2)のオンライン会議ツールはオンライン上で会議の場を提供するものである。上述のようにJSKE22+KEERではWebexを用いたが、オンライン会議ツールとしては他にもZoom、Skype、Amazon Chimeなど色々なものがあり、事情や好みによって選定することになる。いずれのツールも本来はグループミーティングを想定したもので、会議開催を主目的として開発されたわけではない。そのため現状では学会開催に理想的なツールがあるとは必ずしも言えないが、今後オンライン学会が新しい生活様式のひとつとして定着していく中で、新しいツールや優れた機能が実現されると期待される。

3)のチームコミュニケーションツールは主催者側のスタッフ同士のコミュニケーションと情報共有のために不可欠なものである。メールなどは本来基本的に1対1を想定したコミュニケーションツールとして開発されたものである。短期間にオンライン会議実現に向けてチーム全体で情報共有や共通認識を促進するには、よりチーム作業に適したツールが望ましい。チームコミュニケーションツールはオンライン会議開催のためだけでなく、編集委員会や理事会関係など学会活動に関わる業務全般に渡って定常的に活用できるものである。JSKE22+KEERではSlackを用いたが、LINE WORKS、Chatworkなど多数のツールがあり、学会活動に限らずコロナ禍でのテレワークで貴重な存在となっている。

3.2 オンライン開催の課題

我々自身もJSKE22+KEERで経験したように、オンラインであってもほぼ支障なく学会は開催できる。ポスター発表などは形式の変更や工夫が必要となるが、研究成果の発表という意味では問題なく出来る。しかし、現地会場で対面して行う

場合と全く同じというわけではない。オンラインならではのメリットもある（だからこそコロナ禍でも開催できるのである）一方、デメリットもある。

まず、接続トラブルのリスクの大きさがある。現地開催でも様々なトラブルは生じるが臨機応変な対応がし易く、ある意味「出たとこ勝負」的な発想でも対応できる。それに比べてオンラインでは対応できる範囲に限られる。接続切れとなった参加者に対してその時点で主催者側ができることはない。想定されるトラブルについては全て対処方法を事前に検討して参加者に提供しておくことが重要である。JSKE22+KEERでも可能な限り準備し、幸い致命的なトラブルもなかったが、筆者は会期中ずっと最悪の事態が起こるリスクを意識しながら常に緊張して過ごした。オンライン環境には見えないものへの不安感は漠然とあるように感じる。

また、オンラインでは対面のリッチなコミュニケーションに比べると微妙な雰囲気伝わりにくい。オンライン学会ではディスカッションや盛り上がりたがらないと指摘されることも多い。もちろん盛り上がる場合もあるが、それはオンラインだから盛り上がったというより内容が良かったと考えるのが妥当であろう。現地開催の会議では質疑応答の時間内に話せなかったことをセッション終了後に発表者に尋ねることは珍しくない。また、会場で会った人とセッション内容に関する話をするのもあれば、直接関係のない雑談で盛り上がることもある。発表者のプレゼンに対する聴衆の反応を見て、どの発表が良かったのかが何となく伝わることもある。今後、オンラインでも雰囲気を上手く伝えられるように会議ツールには進化が臨まれる。雰囲気という捉えどころのないものを伝えるための技術を実現することは、感性工学の研究課題として我々JSKEでも寄与していきたい領域である。

さらに、国際会議の場合には時差の問題には注意が必要である。一般的に「オンライン」には「時空間を超えていつでもどこでも」といったイメージがある。確かにオンラインでは物理空間は超越できるため、現地に赴く必要はなくメリットも大きい。海外出張ならば都合がつかない場合でも、オンラインならば会議の時間枠だけが空いていれば参加できる。しかし、開催地と時差が大きな場所から参加する場合、昼夜が逆転することになってしまう。KEERでは欧州からの参加者の発表は日本時間の夕方になるよう、可能な限り配慮した。幸か不幸か今回のKEERには米国からの参加者がいなかったが、欧州、米国、アジアとなると同じ時間に集うのはたとえオンラインでも困難となる。国際会議ではVOD形式のみの発表形式を採っている例も散見され、インタラクティブ性が低いと残念に感じていたが、主催者側に回ってみて時差の問題の困難さを痛感した。

4. おわりに

コロナ禍が長期化し現在も先行き不透明な状態が続く中、国内外で学会開催はオンラインへの移行が急速に進んでい

る。JSKEでも今年3月の第16回春季大会(JSKE16s)は既にオンライン開催が決定し準備も佳境に入っている。筆者も昨春は成り行き上大変なことに巻き込まれたと我が身の不運を嘆いたこともあったが、結果的には大変貴重な経験をし、個人的にもJSKEにとっても有用な知見を得ることができたと思っている。オンライン会議はコロナ禍が過ぎても新しい生活様式のひとつとして根付くと予想され、オンライン会議実施のノウハウは今後の学会活動に必須なものである。

コロナ禍以前にも都合のつかない人がオンラインで発表することも時としてあったが、現地に赴くのが原則でありオンラインはあくまでオプションと考えられていた。しかし今後はオンライン開催が基本形式となり、むしろ現地開催の方がオプションになっていくと考えられる。オンライン開催の枠組みを用いて会議を実現し、必要に応じて会議ツールを現地会場に置き換える。併用すればハイブリッド開催となる。現地開催の場合には、従来当然のように享受してきた対面でのリッチなコミュニケーションの良さを十分活かせるJSKEでありたいと思う。

参 考 文 献

- [1] 福本誠：第15回日本感性工学会春季大会に関する報告，感性工学，18(2)，p.78，2020。
- [2] Confit：Confitで、できること，<https://about-confit.atlas.jp/>（2021.02.08閲覧）。
- [3] 堀田竜生：【60大会掲載】新型コロナウイルスによる学会の開催中止情報まとめ【2020年3月】，<https://about-confit.atlas.jp/news/2020-03-18-2603>（2021.02.08閲覧）。
- [4] 宮崎純 他：DEIM開催記録サイバーシンポジウムはいかに開催されたか－DEIM2020の『壮大な実験』とは，NII Today，88，2020。
- [5] Confit：JSKE22のトップ画面，<https://confit.atlas.jp/guide/event/jske22/top>（2021.02.08閲覧）。
- [6] 庄司裕子：第22回日本感性工学会大会に関する報告，感性工学，18(4)，p.201，2020。

（2021年2月10日受理）

著 者 紹 介

庄司 裕子（正会員）

1989年 東京大学工学部卒業，1991年 同大学院工学系研究科修士課程修了，2002年 同大学院工学系研究科博士課程修了。メーカ研究所勤務，川村学園女子大学教育学部助教授などを経て，2004年より中央大学理工学部経営システム工学科助教授，2007年 准教授，2011年 教授，

現在に至る。あいまいさを含む思考プロセスの理解と支援，動的な感性モデルの構築と工学的応用などに関する研究をおこなっている。現在，日本感性工学会会長，日本学術会議第25期連携会員，情報処理学会，人工知能学会，日本認知科学会などの各会員，博士（工学）。